

悪役令息の役どころからは
サクツと離脱することにする。

目次

悪役令息の役どころからは
サクッと離脱することにする。
2

番外編 名もなき従者

番外編 成人したら……？

CHARACTERS

ミルリス・スノーデン

公爵家から出て商会を立ち上げ、
国をバンデミックから
救うために奮闘中。
相変わらずの箱入り氣質で、
周囲をメロメロにしている。

シリウス・ブレイン

ミルリスの侍従兼側近。
ミルの傍から離れず、
無事に公爵家を出たことを機に、
思う存分に甘やかしている。

アレックス・スノーデン

元公爵の断罪により、
養子に入り、後継となった
スノーデン公爵家次期当主。
ルディアスを受け入れ、
懐かせるだけの懐の深さをもつ。

アルフレッド・マージェス

マージェス伯爵家の長男。
シリウスの学生時代からの友人。
貴族の間で有名な
マジ宝石店の店主で
ミルを弟のように可愛がっている。

オルフェウス・マージェス

マージェス伯爵家次男。
茶葉、薬草などを扱う
ミントピア商会の商会長であり、
マージェス商会の陰の実力者。
可愛いものに目がない。

ルディアス・ゴールド

ミルリスの元婚約者。
ミルが公爵家を出たことにより、
嫁入りしてアレックスと婚約することに。

悪役令息の役どころからは
サクッと離脱することにする。

プロローグ

ある日、鏡に映る自分の顔を見て、いきなり頭の中に前世の記憶が蘇った。

「俺は悪役令息なのではないか？」

そう、この顔は、腐女子だった姉に頼まれて無理やりクリアさせられたBLゲーム「僕の王子さま」の悪役令息、スノーデン公爵家嫡男ミルリス。

とすると、ここはゲームの世界ということになるのだろうか？ 大変由々しき問題だ。

ゲームの中のミルリスは「プライドが高く無表情無感情。主人公である人気者の弟レオリスを妬み虐げまくる悪役」……ということになっていたはず。

納得できない。実のところ、現実の俺は悪役などではない。むしろ被害者なのだ。

筆頭公爵家当主である父と母は、可愛らしい容姿の弟をただひたすらに溺愛し、甘やかした。皆の愛を一身に受け、成績が悪くとも当たり前のように受け入れられ、いつも楽しげに笑っているレオリス。

「幸せな公爵家」のしわ寄せは、全て俺に来ていた。

両親は俺に「公爵家嫡男として」厳しい教育を課した。幼い頃から俺に「感情を殺せ」「表情に出すな」と強いて、一切の甘えも自由も許さずに冷遇したのだ。

そんな俺の唯一の心の支えは、俺を育ててくれた乳母。彼女は、父にいわれのない叱責を受け、母にも冷遇される幼い俺を抱きしめ、温かくて大きなエプロンでくるんでくれた。夜遅くまで勉強するせいで冷え切った俺の手に息を吹きかけ、温めてくれた。冷たく凍えそうな公爵家の中で、俺のただひとつの居場所。それが乳母だった。

だがその乳母も、俺が四歳のとき「ミルリス様をもつと氣遣って差し上げてくださいませ！」と両親に抗議し、「雇い主に逆らった」として退職を余儀なくされた。

俺がどんなに両親に懇願しようとその決定は覆されることなく、乳母の行く先も知らされず手紙を書くことすら許されなかった。

唯一の愛を奪われたこのとき、俺は「この家の息子はレオリスだけ。俺は単に『将来の公爵家当主』という役割を課せられたにすぎないのだ」と悟った。

そして俺は完全に一人になり、全てを諦めた。

なのに五歳のとき、俺はその「将来の公爵家当主」という役割すら取り上げられることとなる。この世界では同性も婚姻できる。むしろ貴族の嫡男以下は「お家騒動の火種となる子を残さぬように」と、子を成せぬ同性婚が推奨されていた。

俺と同じ年齢である第三王子ルディアスも例外ではない。

その「同性婚の相手」として選ばれたのが、なんと「公爵家嫡男」である俺だったのだ。

「筆頭公爵家当主の地位をルディアスに譲り、妻として彼を支えるための婚約」が決められた。「公爵家当主となるのだから」という口実で成された、俺のこれまでの「教育という名の虐待」の一切を無視して。

先述の通り、貴族の同性婚は「お家騒動の火種となる子を残さぬため」という意味合いが強い。したがって、後継を残すべき嫡男が、というのはあり得ない話なのだ。

だが、陛下の「継承権のない第三王子ルディアスを、なんとか良い条件で降嫡させてやりたい」という親心と、俺の父である公爵の「王家と縁を結びたい」という野心とが奇跡的に合致した結果、あり得ない婚約が成されてしまったのである。

将来的にルディアスが当主となるというのなら、俺にはもう当主教育は不要なはず。

しかし「将来的に当主の座を奪われることになる」俺の「当主教育」は続行され、さらにそこに「王族の妻となるための教育」まで加わった。

なぜなら、公爵である父と母がこう考えたからだ。

「ルディアス殿下を当主に迎え、面倒な仕事は全てミルリスにさせればいい。殿下には弟のレオリスを可愛がってもらい、将来はレオリスに親戚筋から子を産むための妻を娶らせ、その子を後継に据えれば公爵家は安泰だ」

要するに「本来なら婿に出すはずの可愛いレオリスを手元に残し、将来的にはその息子に公爵家を継がせたい」というバカげた思惑。

彼らはそのために、同じ自分たちの息子である俺に犠牲を強いることにした。「便利な道具」として俺に当主としての仕事を全て負わせ、使い捨てるつもりだったのだ。

既に乳母の件で「何を言っても無駄なのだ」と学んでいた俺は、逆らうことなくそれを受け入れた。分かっていた。逆らったところで「一切の感情を捨て、公爵家のために生きる、それがお前の義務だ」と言われるだけだ。

それでも当初は期待していたのだ。俺の婚約者なら、俺を愛してくれるかもしれない。俺の味方になってくれるかもしれない。

でもそんな期待も、伸ばした手を叩きのけられた初日に挫かれた。

ルディアスは婚約者である俺を「可愛げがない」と冷遇し、婚約者の弟であるレオリスを可愛がった。彼は学園に通うようになって、弟にだけ愛称呼びを許し傍に置いた。

まことしやかに学園に広まる「寵愛される弟を妬み、虐げる兄」という俺の悪評。

俺の冷静な態度とクールな容姿もその悪評に信憑性を与えた。

銀髪に紫の瞳という、人形のように整いすぎた容貌。幼い頃から父により身体に叩き込まれた「無感情と無関心」。疲れ切っているせいで顔色は常に青白く、おまけに寝不足で目つきまで悪くなっていた。そのせいで冷たくて近寄り難い空気を漂わせてしまっていたのだ。

いわれのない悪評を立てられ、友人すらいいない一人ぼっちの日々。ギリギリの精神状態だった俺には、悪評を否定する気力すらなかった。

それでも、ひたすらに耐えていた。努力すれば報われる日がくるのではないかと。両親に対して

も「家族なのだからいつかは理解してもらえるのでは」というわずかな希望を捨てきれずにいた。一方で、言っても無駄なのだと、諦めてもいた。

相反する感情に、心も身体も疲弊し、すり切れる寸前。

そんな俺を支えてくれたのは、侍従であり側近でもあるシリウスだ。

彼は、俺が五歳のとき、父親のブレイン伯爵とともに公爵家を訪れた。

そして俺のどこが気に入ったのか、武門の家門として知られる伯爵家の三男という立場でありながら、自ら進んで俺の従者として名乗りを上げてくれたのだ。

このときシリウスはまだ十歳。本来ならば貴族子弟として世話をされる側の立場だったというのに、彼は公爵家に「従者見習い」として入り、俺の傍に付き添い、俺を支えてくれた。

つらい夜、そっと俺の背に毛布を掛けホットミルクを差し出してくれるシルがいなければ、どうの昔に俺は心を失って「物言わぬ人形」になっていたに違いない。

公爵家や学園で冷遇されようと、シルだけは俺を褒めてくれた。「頑張りすぎないように」と心を配り、俺が熱を出した夜には一晩中寄り添ってくれた。乳母の与えてくれた温かさを、シルが俺に思い出させてくれたのだ。

シルの傍でだけは息ができる気がした。冷たく凍えた身体に熱が戻る気がした。

彼はその優秀な頭脳と才能、そして「伯爵家の息子」という地位を武器に、俺を冷遇する公爵家の中で唯一俺の絶対的な味方であり続けてくれた。そのことに俺がどれだけ救われていたことか！

あれから十一年。

俺の心が壊れずにいられたのは、シルがいてくれたからだ。冷たくつらい毎日の中で、シルだけが俺のよすがだった。

かといって俺の置かれた厳しい状況は変わらない。公爵家のための踏み台として、ただ「消費」されて生きていくのだと諦めていた、そんなとき。

俺に前世の記憶が蘇ったのである。

いや、正確には「情報が映像として頭に入ってきた」というべきか。蘇った記憶は、一切の感情を伴わない「情報」でしかなかったのだから。

ここが本当にBLゲーム「僕の王子さま」の世界なら、俺はゲームのミルリスと同じように、主人公を虐げた冷酷な兄として断罪され、全てを奪われて平民として無念の死を遂げることになる。今なら分かる。きっとゲームのミルリスも、俺と同じだったのだ。ただひたすらに消費されたあげく、冤罪を被せられたに違いない。

それはミルリスが「悪役令息」という役回りだったから。

許せないと思った。

これまで皆に誤解され遠巻きにされてきた。親にも婚約者にも冷遇され、公爵家のために使いつぶされるだけの存在にされ、それでも自分を磨く努力を怠らなかった。不平不満も言わずに我慢してきた。

だがその結果俺を待つのが、ありもしない罪での「断罪」？ ふざけるな！

誠意を尽くしても最後まで報われなかったゲームの中のミルリスを想い、俺は切れた。

努力を重ねた結果「悪役令息」にされ、いわれなき罪で断罪されることになるのなら、自分をすり減らし我慢を重ねてまでここにいる意味などないだろう！

ならば俺は、押し付けられた「悪役令息」の役どころからさっさと離脱し、好き勝手に生きてやる！

家のため？ 嫡男として？ 知ったことか！ こんな家、レオリスにくれてやればいい！

そのためには、どうすればいい？

答えはすぐに出た。断罪を待つ必要なんてない。俺の都合のいい時期に俺をさっさと廃籍させればいい。もはや「ゴミ」としか思えない形だけの家族など、こちらから捨ててしまえばいいのだ。

利用され使いつぶされたあげく、断罪され全てを奪われて平民に落とされるくらいなら、万全な準備を整えた上で自ら平民となるほうが、よほど有意義だ。

そうすれば自動的にルディアスとの婚約も解消となり、「自分の婚約者とレオリスの純愛を阻む悪役令息」ではなくなる。

さて、そうすると……必要なのは「平民となつてからの生活資金」と「住居となる拠点」か。

俺は、前世の知識を利用して独立に向けて備えることにした。具体的には、侍従兼側近だったシルとともに、平民生活の拠点となるエムエス商会を立ち上げることにしたのだった。

そう。俺の唯一の味方、シル。シルがいたからこそ、今の俺がある。

平民になると決めた俺は、シルを手放すことを恐れながらも、シルが望むのならば彼を手放さな

ければならないと思った。だからシルにこう聞いた。

「俺はこれから投資して事業を立ち上げようと思う。投資のための元金には、これまで貯めた俺の個人資産と信託財産、宝石類を売ったものを充当^{あて}するつもりだ。理由は言えないが、投資については勝算がある。それである程度の見通しが立つたら、公爵家に廃籍を願い出て平民になるつもりだ。公爵家から出ることになる俺でも、シリウスは仕えてくれるか？」

本当は「俺に付いて来てくれ」とシルにすがりつきたかった。

だが「当たるかも分からぬ事業のために全てを捨てよ」などというのは、主人としては褒められたものではない。突然の乱心だと呆れられ、見限られても仕方がないと覚悟していた。

そんな俺にシルは言った。「私をなんだと思っているのか」と。

「シリウスだけは信頼できる。シリウスだけは家族だと思っている」

最後になるかもしれないからと本心を告げた俺に、シルは激怒した。

「どうして付いて来いと言わない！ ……俺は必要じゃないのか？」

そしてこう言ってくれたのだ。

「俺はお前の侍従になったときに誓った。俺だけはどんな時も味方であろうと。だから、俺を手放すな。傍に置け。信じろ。俺はお前を裏切らない」と。

我慢できなかった。俺は生まれて初めてのわがままを口にした。

「俺の傍にいろ。俺を支えろ。どんな時も俺から離れるな。たとえ墮^おちようとも最後まで見届けてくれ。俺に何を言っても、何をしてもいいから。頼む」

そう懇願した俺に、シルは当たり前のような顔をして笑った。

「天国だろうと地獄だろうと俺を連れて行け。俺はお前を選んだんだ」

その言葉通り、シルはずっと俺とともにいてくれる。

この時から俺の中でシルは本当の家族になったのだ。どんなに情けない姿を見させても決して俺を裏切らない、俺だけの家族に。

そこからは、あつという間だった。

記憶を取り戻したのは、高等学園入学直前。ゲームのスタートはその一年後、主人公である弟のレオリスが入学してからになる。そして二年後のミルリスの卒業式が、悪役令息の断罪の場。つまり、レオリス^{主人公}のいないこの一年が、俺にとってはチャンスになる。

ゲームによれば、これからこの国に「赤病」と呼ばれる病が入る。治療薬さえあれば回復する病なのだが、隣国特有の風土病だと思われているせいで、この国には治療薬がない。そのためあつという間に病が蔓延。対処する間もなく多くの死者が出ていた。

ゲームの攻略対象たちは、この感染爆発^{パンデミック}で親しい人を失ってしまう。その心の傷から天真爛漫な主人公に魅かれ、傾倒していく。要するに、ミオリスの断罪の一端を担うのが、この「赤病」なのである。

ゲームの中ではこの感染症は「謎の病」だとされ、「赤^{あか}」と気づく間もなくたくさんの命が失われた。だが、ゲームの記憶と前世の感染症に対する知識、そして今生の知識を併せ持つ俺には分

かった。この「謎の病」はきっと「赤病」。感染症であつた「赤」が風土病だと誤解されていたがゆえの悲劇だったのだ。

それを俺が食い止める。自ら商会を作つて「赤」の特効薬を準備し、病の流行に備えるのだ。そうすることで多くの命を救うとともに、治療薬の販売により多くの利益を得ることができる。一石二鳥どころか、一石三鳥。それが俺の計画だった。

公爵家を一切無視することに決めた俺は、父に邪魔をされぬようシルを仮の経営者として二人でエムエス商会を立ち上げた。

その過程で、シルの紹介で、高位貴族の間で絶大な人気を誇る「マージの店」の経営者、マージェス伯爵家の長男アルフレッド^{アル}という、稀有な出資者を得る。

アルは商会への出資者となつてくれただけでなく、俺の仲間となつてくれた。ともに手を取り笑い合い、からかい合い、支え合う、そんな素晴らしい仲間に。

アルの紹介で彼の実家であるマージェス商会とも縁を結んだ。マージェス家は家族のように俺を受け入れてくれただけでなく、商売人としてもエムエス商会を認め、協力してくれることとなった。新たな未来が次々に俺の目の前に開いていく。

初めて思った。明日が楽しみだと。

一方、学園でも変化が起こった。

俺は高等学園入学を機に「公爵家のため」ではなく「俺のために」生きることにした。俺を婚

約者として尊重しようとしてもしないルディアスへの配慮を捨てるとともに、「高位貴族にふさわしく、感情を抑え表情を殺す」ことをやめた。

するとその甲斐あつてか、多くの生徒が俺の味方となってくれたのだ。

生まれて初めてできた友人、クラウスとジーク、ランジェとミルフエ。彼らは俺を信じ、俺の過去の悪評をものともせずに俺の傍にいてくれる。実際「何かあったら言つて。力になるから」という言葉通り、俺を守ろうとルディアスにも立ち向かつてくれた。

信頼のおける友人とともにカフェに寄つて話をしたり、たわいのないおしゃべりに興じる。そんな「当たり前の普通」が、俺にとってどれだけ幸せなことか！

中等学園までが嘘のように楽しい日々。

——そして時が来た。俺が公爵家を捨てるときが。

商会の拠点となる「俺とシルの家」を手に入れた俺は、満を持して公爵たちを断罪することに。婚約者であるルディアスとの定例の茶会。俺はそこで、彼の前で容赦なくこれまでの公爵家の「俺へのあり得ない扱い」を追及した。ルディアスが気づこうとしなかった「婚約者が置かれていた厳しい状況」と「公爵家での冷遇」を、彼の目の前に突き付けたのだ。

「生意気な！」と激昂した公爵が俺に振るつた暴力で、俺の計画の成功は決定的なものとなる。

ルディアスが俺の味方に付いたのである。

彼はこれまでのことを俺に正式に謝罪。「公爵家での冷遇に気づかずすまなかった」と俺に頭を

下げ、廃籍を望む俺に力を貸してくれた。

のみならず、本当は俺のことが好きだったのだと、素直になれなかったのだとの本心を俺に告白。俺が平民になった後も「詫びにもならぬがせて……」と俺と商会のために尽力してくれたのである。

過去の彼の行動を許すとは言えないが、今はもう嫌いではない。慣れ合うつもりはないが、それなりに新しい関係を築いていければと思う。

こうして俺は、希望通りのタイミングで公爵家から籍を抜くことができ、シルと二人の幸せな平民生活を手に入れた。

一方、「王族の婚約者であるミルリスを冷遇し、暴力をふるつた」として、公爵家には厳しい沙汰が下された。遠縁から養子を迎え、その養子をスノーデン公爵家の後継とすることとなったのだ。つまり、事実上の公爵家の乗っ取りを王家が主導した形になる。

公爵たちは「息子が二人もいるにもかかわらず、遠縁の養子に公爵家を奪われることとなった愚かな元当主」というお飾りのような肩書きで、養子のお情けにすがつて屈辱にまみれて生きていくことになる。これまで爵位を笠に着て下位貴族を見下し密かに嘲笑してきた公爵が、逆に嘲笑を浴びる側となるのだ。

プライドの高い公爵たちにとってはつらい日々となるだろうが、自業自得だ。同情の余地はない。こうした公爵家へのいわゆる「逆ザマ」のおかげで、俺は今、元公爵家嫡男として「エムエス

商会のオーナー兼影の経営者」と「貴族学園の学生」という二足の草鞋を履き、シルとともに充実した毎日を送っている。

ようやく俺にも「帰る家」ができた。「ただいま」と言える家があるのは、最高の気分だ（公爵家を家だと思ったことはない。あそこは俺を閉じ込めるだけの冷たく凍えた檻だった）。

学園から「二人の家」に帰り、温かな居間でシルとだらだらくつろぐ。

「もう従者じゃない。対等な立場だって言うんなら、思う存分ミルを甘やかす！」と宣言したシルに「いい子だな」と頭を撫でられ、「今日も可愛い」と頬にキスされ「頑張ったな」と毛布にくるまれる、そんな日々。

こんなに幸せでいいのだろうか。

知らないものを全て切り捨てた俺は、逆に多くのものを得た。

信じられる友や大切な仲間、シルとの穏やかで幸せな暮らし。

元婚約者であるルディアスとも和解し、新たな関係を模索中である。

あとは前世の知識を利用し、「赤病」の流行を食い止めるのみだ！

以前の俺は単に「平民となった俺の生活資金のため」に、「赤病」の治療薬を作ろうと考えた。

優先順位はあくまでも俺とシルであり、それ以外は「副次的効果」にすぎなかった。

でも今はそれだけではない。俺は何よりも大切な人たちを守りたい。俺を信じてくれるみんなのためにも、なんとしても「赤」による蹂躪を食い止めてみせる！

第一章 レオリスとの決別

俺を踏みつけにしてきた公爵を断罪し、ひとまず脅威は去った。

学園生活も順調ならば、商会の運営も順調。俺の人生でここまで幸福な風は、初めてかもしれない。

シルとともに立ち上げたエムエス商会からは、まず「効能のある紅茶」を売り出すことにした。ちなみに、この世界で一般的に飲まれているお茶は、紅茶だ。

砂糖の代わりにジャムやはちみつを入れたりすることもあるが、アレンジはその程度。基本的にはストレートで「茶葉の産地による違いを楽しむ」という飲み方が主流となる。

前世ではお茶として人気のあったハーブも、こちらでは菓子や料理の香りづけに使われたり、ポプリや香油など「香りを楽しむもの」という扱いになっていた。薬効の高さが確認されてはいるものの、それも「嗜好品のお茶として飲む」のではなく、煎じて飲む類の「薬として処方されるもの」という位置づけなのである。

俺とシルが公爵家から独立する足がかりとして立ち上げた、エムエス商会。

その協力者であるオルフェウス・マージェスは、もともとの紅茶好きが高じ「大商会であるマー

ジェス商会から茶葉や薬草を扱う部門を独立させ、自らマージェス商会の傘下、ミンティア商会を立ち上げた」という人物だ。

彼は商会で取り扱う紅茶に薬効をプラスしようと思い立ち、ハーブを混ぜた紅茶を普及させようと独自に研究していた。

ところが、何しろ前例がないため、どういう組み合わせがいいのか、どのハーブがいいのかなど研究をし出したらキリがない。あちこちに手を広げた方がいいが、商品として完成させるまでには至らず、とん挫している状況だった。

そこに俺が、治療薬の材料となる薬草の仕入れの協力を求めに来た。

ミンティア商会で扱っているハーブも「薬草」という分類になるため、治療薬の材料となる薬草も、オル兄にハーブと一緒に仕入れてもらうことができる。

そうすれば「赤」が流行した際に、「治療薬を売るために自ら『赤』を持ち込んだのではないか」「用のない薬を持っていたなんて怪しい。自作自演なのは」などと痛くもない腹を探られずに済む。

そんな目論見もくろみがあつてのことだったのだが……話が弾んだ結果、お互いに「ハーブティーの普及」という別の方面でもタッグを組むことになったのである。

実は、俺の前世の知識の中にはハーブティーの知識もあった。

といってもそれほど詳しくはなく、一般的な知識程度。前世で「紅茶通」と言えば笑われるよう

なレベルのもののだが、まだハーブティーがないこちらの世界では、十分に通用するものだ。

そこで俺からオル兄にこう提案してみた。「紅茶に混ぜるのではなく、ハーブをメインに。例えば使用目的ごとにハーブを組み合わせてハーブティーにしてみてもどうか」と。

例えば「リラックス効果」には、ラベンダーにカモミール。

「アンチエイジング効果」には、ビタミンが豊富で疲労回復や美肌効果のあるローズヒップをハイビスカスやローズマリーと合わせて。

疲れて食欲がないときには「胃腸の調子を整える効果」があるミントにレモングラス、レモンバームでスッキリ。カモミールには抗炎症効果があるから、免疫力を強化するエキナセアと組み合わせ、「病気の予防」として。

こうした俺の提案は諸手もろてを挙げて歓迎され、オル兄の研究はここにきてようやく実を結んだ。

ミンティア商会とエムエス商会で共同開発された「薬効のあるハーブティー」は、「エムエス・メディソンティー」と名付けられ、「エムエス商会専用の茶葉」としてうちの商会の目玉商品となったのである。

もちろん、ただそのまま販売するだけでは芸がない。販売方法にも工夫を凝らした。

仕入れた茶葉を、種別に可愛らしい小瓶に入れて販売することにしたのだ。

通常の紅茶の茶葉より量を少なめにしたお試しサイズ。その代わりいろいろな種類の茶葉をセツトにして販売する。そうすることで、女性たちがファッション感覚で気軽にハーブティーを試せるようにしたのである。

ちなみにこれは、学園の友人であるミルフェとランジェのアイディアだ。

ご令嬢二人に「これから販売を考えているから、秘密で」とした上で試作品を渡し、感想を聞いてみたのだ。

すると「変わった味だから、人によって好みに合う合わないがあると思うの。お試しサイズがあれば買いやすいわね」とか「なら少量を可愛い瓶に入れて売って見たら？ それなら、飲んだあとも瓶を飾っておけるでしょう？ 女性ならすぐに飛びつくわよ」などという意見が出た。

そもそも俺には「空き瓶を飾る」という発想がなかった。飲んだら捨てるものだと思い込んでいただけに、この意見は目から鱗^{うろこ}だった。

さっそく様々な小瓶を取り寄せ、二人にどれがいいのかを相談。

こうして満を持して販売されたのが「エムエス・メディソントー」というわけだ。

ルディが「苦労をさせてきた詫^{わづら}びに」と陛下から「王室御用達」の印を貰ってきてくれたので、他の商會に類似品を出されるような心配はない。何しろ王家が後ろについているのだから。

だが念のため小瓶に「エムエス」と刻印してオリジナルの瓶にした。そうすることで「エムエス商會」というブランドを印象付けることにしたのだ。

最初に販売したお茶は、四種類。

リラックス効果のあるお茶「サイレント」、美肌とアンチエイジング効果のあるお茶「ミューゼ」、気分をスッキリさせ胃腸を整える効果のあるお茶「リモーネ」、病気の予防効果のあるお茶「ガーディアン」。

瓶の色はそれぞれ薄紫、ピンク、水色、黄緑。まずはこの四本をセットで販売した。

ルディを通じてお礼のつもりで王城にもお届けしたのだが、これが非常に好評で、定期的に欲しいという言葉をもらった。形ばかりの「御用達」ではなく本当にご鼻^{ひな}屑^{くせ}にしていただけなんて、思ってもみなかった。有難い。

ということ、商會の滑り出しは順調そのもの。ルディのおかげで王城からも俺とシルにまとまった収入が、しかも定期的に入る。

これで商會の運営は一安心だ。

一方で、当初の目的である赤病の治療薬の製造も続けている。

薬草を使ったハーブティーが売れていることもあって、あちこちで薬草や薬を買い付けても全く怪しまれることがない。

当初は予算面での心配もあったのだが、それもハーブティーの予想以上の売れ行きによって解消できた。

嬉しい誤算だ。

おかげで最初の予定よりも前倒しで目標数を確保できそうだ。

既に出来上がっている分の治療薬は、商會の倉庫で役に立つ日を待っている。

もちろん使わずに済めばそれに越したことはないのだが……ゲームの記憶によれば、病が流行^はるのは晩秋から初冬。Xデーまであと少し。気は抜けない。

その日、学園が終わる頃にはだいぶ調べが進んでいた。

レオリースの仲間の中でも特に「レオリースの取り巻き」とされていた伯爵家の次男マクベスが、脱出の手助けをしていたことが判明したのだ。

マクベスは、レオリースに「婚約解消された兄の逆恨みのせいで、寮に閉じ込められて勉強漬けにされている。ルディに会わせてもらえない、つらい。ルディは僕がこんな目に遭っていることを知らないんだ」と涙ながらに訴えられ、手助けしたのだという。

彼は「ルディも僕を救った君に感謝するはずだよ」というレオリースの言葉を信じ、自分は良いことをしたのだとさえ思っていた。

だから監視に問い詰められても、隠すどころか堂々とそれを暴露したのである。

弟も馬鹿ならその友人も馬鹿だ。類は友を呼ぶとはこのことなのか？

マクベスは、監視から「ルディアス殿下が愛していたのは兄のミルリスであり、レオリースには『義理の兄弟になるから』と配慮していただけにすぎない。レオリースの行動があまりにも目に余ったため、ルディアス殿下の指示で躰直しとしての教育が行われていたのだ」と聞き、「聞いていた話と違う」と真っ青になって震え出したという。

もしもそれが本当ならば、自分たちはこれまで「殿下の愛する婚約者を貶めたうえ、根拠のない悪評をばら撒いてきた」ことになる。もしかすると、それが今回の婚約解消の原因の一端を担ってしまったのではないか？

それだけではない。殿下の意向に背き、レオリースの逃亡に手を貸してしまったのだ。

不敬どころの騒ぎではない。下手したら一家断絶……

大事にしたくない伯爵家の当主と長兄は、すぐさま動いた。その日のうちに「伯爵家は関与していない」と分かりやすい形で示したのである。

マクベスは王家から沙汰を下される前に「自らの罪を省み、贖罪のため学園を辞して田舎の領地で教育を受け直す」ことになった。

この騒動は中等学園に一気に広まった。

「公爵家の醜聞」としてではなく、「優秀な兄を貶めようと虚偽の噂を広め、婚約者であるルディアス殿下を奪うことを画策した、腹黒い弟とその仲間たちの醜聞」として。

そして「ルディアス殿下の婚約解消の原因は、ミルリス様ではなくレオリースにあったのだ」という新たな噂もまことしやかに広まったのだった。

こうして一連の騒動は終結となった。ザマアと思わなくもないが、正直、呆れのほうが勝つ。

俺はあえて婚約解消の理由については口をつぐみ、公表を控えていた。

だからレオリースさえあのまま大人しく言われた通りにしていれば、いずれ公爵家の醜聞も下火になり、数年後には何かしらの未来が開けていたはずなのに。

それをレオリースは自ら台無しにしてしまったのだ。

俺は正直、レオリースが好きではない。俺の努力の上に胡坐をかき、俺を踏みつけにして生きていくことに何の疑問も持っていなかった弟なのだから。

「それでも弟だろう」などと言う者には、逆に聞きたい。長年その弟に「愛されないのはお兄様自身のせいでしょ」などと馬鹿にされ、悪評をばら撒かれ「悪役令息」という役どころを押し付けられてきたのだ。そんな相手に好意を持てるのか、と。

これまで俺は、レオリースにされたことをあえて公言してこなかった。なぜか。

それは、レオリースも公爵たちの被害者だと思っていたからだ。

確かに公爵たちはレオリースを溺愛していた。

しかし彼らの与えた「愛」は、自分たちに都合のよい「見目のいいお人形」に向けるもの。

本当に愛していたのなら、次男であるレオリースの将来を考え、しっかりと教育し躾けたはずだ。愛するだけでなく、間違っているときにはそれを正し、やるべきことはさせる。それが本来の親というものだろう。

だが彼らはレオリースに「可愛いだけの愚かな息子」でいて欲しかったのだ。自分たちを決して脅かさぬ、ただ可愛いだけの息子でいて欲しかったのだ。

もともとレオリース自身、公爵と夫人に似た性質を持っていたのだろう。素直で感情豊かな反面、出来の良い相手を逆恨みし、わざと貶めることで溜飲（どくだみ）を下げるようなところがあった。

公爵と夫人は、そこを改めさせるどころか増長させた。

彼らは「ミルリスから悪い影響を受けぬように」とレオリースを俺から引き離し、溺愛して囲い込み、「あなたは特別」「可愛いだけでいい」「地位も高いし可愛い」だから、誰からも愛されて当然」などと吹き込みながら、ただ甘やかして育てたのである。

その結果としてレオリースは、困ったことがあれば被害者ぶり、宿題は取り巻きにやらせ、嫌なことからは逃げ、都合のいいことしか見ないような子どもに育ってしまった。

先代である祖父母が生きていた頃は、ことあるごとに公爵たちにこう提言してくれていた。「ミルリスに厳しすぎる。レオリースをもっとしっかりと躾けるべきだ」と。

しかし公爵たちはそれに耳を傾けなかった。それどころか「当主は私だ。口を出すな」と祖父母を遠ざけ、公爵家に近寄れぬようにしてしまった。

それにより、ますますレオリースは甘やかされ、何もできぬ子になった。人に甘え都合よく利用することを覚え、自分が楽をするために平気で嘘をつくことを覚えてしまったのだ。

そう育てられたことを知っているからこそ、俺はレオリースに温情を与えた。

王家とルディに対する配慮もあるが、婚約解消の理由を伏せ、学園長の希望通り卒業まで「スノーデン」を名乗ったままでいることで俺の魔籍を隠し、レオリースに自身で身を立てられるようになるだけの時間の猶予を与えたのだ。

必死で頑張れば、田舎に放逐となる公爵たちから離れ、新たな道を歩めたはずだ。それがレオリースが真つ当にやり直すチャンスだったのに……

だがレオリースは、我が身を顧みることもなく、ただ「悪役の兄」に全ての責任を押し付け、逃げた。現実に向き合うことから逃げたのだ。

ルディには「教育がダメだった場合はもうレオリースにはかかわらないように」と頼んであった。「レオリースが甘え、頼ってきても突き放すように」と。もしもそこで甘い顔をすれば、レオリー

スは今度はルディに寄生するだろうから。

彼はその約束を守り、レオリースが来ても手は貸さないと誓ってくれた。ルディは、こういった事情から、レオリースが逃げたことを知るや否や俺に知らせに来てくれたのだった。

さて、話を戻そう。

ルディの報告から数時間後、新たな動きがあった。

学園から逃亡したレオリースは、一旦マクベス家の別邸に隠れ、そこからルディに会うために一人で王城に向かったらしい。ところが、王城に入る前に「約束のない者は取り次ぐなど言われている」と門番に追い返されてしまった。

そこで王城近くの小さな植え込みの間に隠れてルディの馬車を待ち伏せ、夕刻ルディが帰城したタイミングで、物陰から馬車の前に飛び出した。

さすがに驚いたものの、一度きちんと話をする必要があると思ったルディは、馬車から降りてレオリースに向き合った。その間にすかさず護衛が割り込む。

さもあらん。レオリースはたった一日ですっかり面変わりしていた。

マクベス邸から徒歩で人目を避けながら移動してきたのだろう。洒落者のレオリースではあり得ないほど埃と泥まみれになっており、その目だけが異様にギラギラと輝いていた。

思わず後ずさりしたルディの表情には目もくれず、喜色満面で言い募るレオリース。

「ルディ！ 僕だよ、レオリース！ ねえ、お兄様が好きだなんて嘘でしょう？ あんなに可愛げ

がない人を好きはずないもん！ どう考えても僕のほうが可愛いんだもの。ルディが好きなのは僕だよな？ お兄様とはもう婚約解消したんだし、早く僕と婚約して！ お兄様はもう平民になっちゃったんだし、あんな薄情な人はもういいでしょ？ 家のことを心配してるんなら、大丈夫！ 誰か雇って仕事をさせたらいいんだし。ね？ 心配しないで！ ルディは僕と結婚するだけでいいの。そうしたら公爵家当主になれるんだよ？ ね？」

口を挟む隙もなく一方的に捲し立てられたルディは、心底ぞつとしたという。「あの茶会でミルリースと俺の話を聞いたにもかかわらず、まだそんなことを思っていたのか」と。

その盲目的な言動と狂気を含んだ目の色に恐怖すら感じたルディは、護衛の背に護られながらもしっかりとレオリースに釘を刺した。

「この際だ、はつきりと言っておく。私にはお前との未来はない。私が愛しているのはミルリースだ。お前ではない。そもそもお前が近づくのを許したのは、将来お前の子をミルリースと私の養子にすると決まっていたからだ。そのためにお前とは円満な関係を作る必要があった。だが一方で、私の愚かさゆえ、ミルリースに嫉妬させたいという気持ちもあった。それがお前を増長させてしまったことは否めない。私にもお前をそうさせた責があると思えばこそ、高等学園卒業までの四年の猶予という温情をかけてやったのだが……。むしろこうなってまでそのようなことを言うお前を嫌悪している。今後、私がお前にかかわることはない」

あえて厳しく、レオリースに一切付け入る隙を与えぬ言い回しを心がけたのだという。

言われたレオリースはいえ、何を言われているのか理解していない表情でぼんやりとそれを

聞くだけ。ルディの言葉が響いた様子は、一切なかった。

ルディは、それでもレオリースが目を覚ますことを期待して、少しトーンを落として付け加えた。「いいか？ お前に分かるように説明するから、よく考えるのだ。お前は次男だ。つまり、本来ならば成人したら家を出なければならぬ立場。だからこそ、お前は婿入りするか自ら身を立てる必要がある。お前だけではない、私とて同じだ。どの家でも嫡男以外は皆そうしている、当たり前のことなのだ」

そして「罪を償うのは自分も一緒なのだ」と、そういう意味で自らの沙汰についても告げた。

「私は高等学園を卒業後、公爵家と婚姻を結ぶ。だがその相手は、公爵家に新たに迎える養子の男になる。お前ではない。王命により、私はその男の嫁として降嫁することになった。それが私の責任の取り方だ」

レオリースだけが悪いわけではない、自分もきちんと罪を償うのだからと。そう伝えた上で、ルディはもう一度レオリースに決断を促した。

「お前も自分の行く末を選べ。どのみちお前を公爵家の籍に置いてやるのは高等学園を卒業するまでだ。公爵家を出された後は、どこへでも行って好きにできる。さあ、監視とともに戻り、学び直すか？ それとも両親と運命とともにする道を選ぶのか？ どうする？」

レオリースは、ここに至ってもまだ自分が何を言われているのか理解できていないようだった。真っ青になりながらもぎこちない笑みを浮かべ、可愛らしいともてはやされた、首を傾げた上目遣いでルディを見上げるレオリース。

「ねえ、なんで僕が公爵家を出なきゃならないの？ だって、だって、お父様もお母様も、ずっと公爵家にいていいって……」

レオリースがずっと公爵家にいる未来。それは、ミルリースがお飾りの妻として公爵家の仕事を全て肩代わりして使いつぶされ、レオリースは一切の義務を負わず寵愛だけを甘受して遊び暮らす、レオリースにとつてのみ都合のいい、そんな未来。

ルディはそれを聞いて思わずカッとなった。このとき、レオリースを完全に見限ると決めた。

「お前の兄ミルリースの犠牲のもつで、か。お前はそれを疑問には思わなかったのか？ どこまでミルリースを踏みつけにするつもりだったのだ？」

詰問するルディに向かって、レオリースは心底不思議そうな顔で無邪気に首を傾げた。

「え？ だってお兄様は勉強が好きでしょ？ お兄様が働いて、僕が愛される。役割分担なんだから。仕方ないでしょう？」

ルディは愕然とした。

「ああ、公爵家はここまで歪んでいたのか。こんな中でミルリースは暮らしていたのか」と。会話にならないと諦めたルディは、事実だけを伝えることにする。

「もとより私にそのつもりはない。どのみちお前との未来などなかったのだ。私の未来を勝手に画策した罪を見逃したのは、ひとえにミルリースの頼みだったからだ。ミルリースは、最後の温情として、卒業までにお前に自らの身を立てる術を与えようとしたのに……お前は変わらなかった。身を改めるどころか、さらに兄の悪評を広めた。お前はミルリースの与えた最後のチャンスを無にし

たのだ。そのことをよく覚えておくがいい。自業自得だ。私とミルリスにはかわるな。お前とはもう無関係の他人なのだから」

ここまで言われ、ようやくレオリスも危機感を覚えたらしく、さっと顔色を変えた。護衛の隙をつき、ヒステリックな声をあげてルディにしがみつく。

「え？ ウソ……ウソでしょ？ あいつから何を吹き込まれたの？ それ、全部ウソだから！ ねえ、僕の話聞いて！ ルディ！」

ルディはそんなレオリスを振り払った。

「最後までミルリスのせいにするのか？ いいかげんにしろ！ 今までお前と行動をとみにし、誤解を与えるような行動をとってきた自分が心底嫌になる。ミルリスは何も言っていない。人のせいにするのも大概にしたらどうだ？ ……最後の忠告だ。現実から目を背けるな。私もお前も自分のしたことの責任をとるべきだ」

「ルディ！ 待つて！ ねえ、話を聞いてよ！」

これ以上話しても無駄だと悟ったルディは、護衛にレオリスを任せ、振り返りもせずに城内に入った。

護衛はルディを見送った後、レオリスをその場に残して門を閉めた。

しばらくして確認に行かせたところ、レオリスはもういなくなっていたのだという。

翌朝学園に登校してからでもいいのに、ルディはその夜のうちに、「少しでも早いほうがいいだろう」と、わざわざこのことを伝えるに商会まで来てくれた。

「念のため寮と公爵家に確認に行かせたのだが、戻ってはいなかった。とすれば、あとはまた別の友人のところか、ミルのところに向かうつもりなのでは、と思つてな。……このようなことになつてしまつてすまない、ミル」

プライドも何もかなぐり捨て「俺も同罪だ」「本当に申し訳なかった」と頭を下げるルディ。彼はこう言つて話を締めた。

「俺にできることがあれば言つてくれ。できる限りのことはしよう」

お前は本当に変わったな、ルディ。気持ちを押し付けるのではなく、俺の意志を尊重してくれるようになった。

「いや。レオリスをああい風に育てたのは公爵家だ。まあ、あそこまで増長させた責任はルディにもあるがな」

もう気にしていないという意味を込めて片目をつぶってみせると、情けなさそうに眉を下げて苦笑された。

「ああ、分かつている。……いや、ようやく理解したというべきか。償いはしていくつもりだ。とりあえず俺は城に戻る。念のため護衛を屋敷の外に一人残していくから、何かあれば彼を使いにか越してくれ」

「ありがとう。迷惑をかけるな」

「自業自得だからな。甘んじて受けるさ」

じゃあまた学園で、とヒラリと手を振り、ルディは帰つていった。

ルディが帰った後、なんだか急に力が抜けたように感じて、ぐったりしてしまった。疲れた。身体ではなく精神的に。

お気に入りのダイニングのソファであおむけになってゴロゴロしていると、ソファの肘置きにひよいと腰かけたシルが、しみじみとした口調でこう言い出した。

「馬鹿王子だと思っていたが、ずいぶん変わったものだな。……なあ、最初からああたったら、ミルはどうした？ 婚約したままだったか？」

冗談めかして言いつつ、腰かけたまま身をかがめて、そっと俺の髪をひと房取り唇をつける。不安を少し滲ませたシルの上目遣いに、少しだけ胸が高鳴ってしまった。

「うーん。そもそも最初からああではなかったからな。まあ……婚約したままだったかも。今のルディは嫌いじゃない」

それを聞いたシルの顔が、一気にしかめ面になった。こら、最後まで聞け。

顔の横に置かれたシルの脚を撫でるようにして宥め、苦笑いしながら続ける。

「だが、もしもの話をしても仕方ないだろう？ 実際には違ったんだし、俺を助けてくれたのも俺に寄り添って支えてくれたのも、全部シルなんだから」

ふともう一言付け加えた。

「それにアイツと婚約したままの俺より、シルという今の俺のほうが俺は好きだし、幸せだ」

そう言っつてシルを見上げると、「ミル！」とソファの背もたれと俺の間に無理やり身体を割り込ませたシルに、ぎゅつと頭を抱かれた。

なんだ、甘えただな。俺の肩に顔を埋めて懐いてくるシルの腕をぼんぼんと叩き、続ける。

「ルディは変わった。これまでの俺の公爵家での扱いを知って、やっと俺の気持ちを理解してくれた。俺の廃籍に協力してくれたし、俺の学費も出してくれた。商会にも配慮して王家御用達をくれただろう？」

などと理由を並べてはみたが、まあ、結局はこういうことなのだ。

「俺にはシルがいてくれるから、もういい。だからもう嫌ってやるな」

とたん、シルの機嫌が急に直った。

シャキッと背筋を伸ばし、ご機嫌で剃り跡ひとつない顎を撫でている。

「そういえば、王家御用達はアイツのおかげか。……うん、太い客だと思えばいい、許せる。せいぜい今後ミルのために頑張ってもらおう。引き出せるだけ金を引き出してやろうぜ」

シルはルディを金づる扱いすることにしたようだ。いつまでも敵視しているよりは建設的かもしれない。今のルディなら「あはは！ 光栄だな！」くらいは言ってくれそうだ。

翌日、念のため周囲を警戒して過ごした。

だが高等学園にレオリスが押しかけてくるようなことはなかった。

それで少し気が抜けていたのかもしれない。学園から屋敷に戻った際、いつもならシルが先に馬車から降りてエスコートしてくれるのを待つのだが、つい先に足を踏み出してしまったのだ。

「！ ミルっ！」

焦ったシルに止められたが、時すでに遅し。馬車から降りたとたん、門柱の陰から誰かが躍り出て、そのまま俺を上から押さえつけるようにしてのしかかってきた。

「うわっ！」

上に乗った相手を見て、俺は驚きのあまりギョッと目を見開いた。

「!? レオリス!?」

驚くほどボロボロになっているが、確かにレオリスだ。

憎しみに目をギラギラさせ、まるで手負いの獣のよう。可愛らしいと言われる容姿も形無しだ。王城からずっと街を彷徨^{さまよ}ったままでいたのだろうか。世間知らずが、よく無事だったものだ。パシッ！ レオリスがサッと手を振り上げ俺の頬を叩く。

「アンタのせいだ！ アンタのわがままのせいで、僕がこんなことになったんだから！ どうしてくれるのっ！ なんてお父様に歯向かったの？ お飾りの妻だって、王子の妻になれるんだからいいでしょ！ アンタは黙って仕事してるだけで良かったのに！ それで全部うまく収まるはずだったのに！」

痛みを感じるより、言葉の衝撃のほうが先に来た。

レオリスは、自分が何を言っているのか分かってているのか？

あまりにも身勝手な言い草に言葉すら発せずにいる俺に、キッと毗^{まじり}を吊り上げるレオリス。

「ちゃんと聞いているの？ アンタのせいで僕の将来が台無しになったんだよ!? 寮に入られて見張りまでつけられて勉強漬けにされてさ！ なんとか逃げ出して帰ったのに、お父様はイライラし

て怒鳴ってばかりだし、お母様は泣いてばかり！ オマケに変な人が偉そうにしてたんだから！ アンタさえ大人しくしてたらこんなことにはならなかったのにっ！」

喚きながら、どこで手に入れたのかナイフのようなものを俺に突き付けてきた。

恐怖より先に俺が感じたのは、怒り。

頭の芯がスツと冷えた。

お前がそれを言うのか。俺を踏みつけにしながら両親の溺愛の上で胡坐をかいていたお前が。

「アンタが一生犠牲になっていれば良かったのだ」と、そう言うのか。

どこまで俺を馬鹿にすれば気がすむ？ そのうえ、命まで脅かそうとするなど、笑止！

命の危機にありながら、俺は妙に冷静な頭で考えた。大丈夫だ。きっとシルがなんとかしてくれる。俺はそれまでレオリスの気をそらせばいい。

視界の端で確認すると、シルがレオリスを刺激しないよう静かにレオリスの死角に移動して合図を送ってくれていた。よし、ならば……

俺はあえてレオリスを挑発するような言葉を口にした。

「悪いが何とも思わない。俺にとってお前たちは家族でもなんでもないのだから。俺をずっとそう扱ってきたのはお前たちだろう？ わがままを言っているのはどっちだ？」

ビクリと反応したのを確かめ、さらにレオリスにとって聞きたくないだろう現実を突き付ける。「俺の犠牲の上に胡坐をかいてきたのは誰だ？ 今まで好き放題してきたツケを払うときがきた、それだけのこと。それでも改心して学び直せば道はあったものを……。なぜ自分の力で戦おうと

しない？ 学んだもの全てがお前の未来を切り開く力となるのに。お前の将来を台無しにしたのは、俺じゃない。俺がやったチャンスを活かさず、楽なほうに逃げたお前自身だ」

吐き捨てるように言い捨て、ダメ押しとばかりにフンと鼻を鳴らして嘲笑う俺に、レオリースの顔が激情で真っ赤に染まった。

「は!? ふざけないでよ！ チャンス？ あんなの虐待じゃん！ 朝から晩まで勉強！ 寝る時間まで削られて！ そんなの僕にできるわけないでしょ！」

その言葉で自分の顔から表情が消えるのが分かった。一切の色と温度を消した声でレオリースに告げる。

「俺はそれを三歳さんさいの時からずっと強いられていた」

レオリースはその俺の言葉を聞いてなお、自分のほうが正しいのだと醜くその唇を曲げた。

「そんなの僕が頼んだわけじゃないし、僕のせいじゃないでしょ！ とにかく、僕がこうなったのはアンタの責任なの！ ルデイに『このままだと平民になる』なんて変なことまで言われたんだからね！ なんとかしてよ！ ルデイに取り次いで！ レオリースは悪くない、誤解があつたんだって、ルデイに言つてよ！」

ナイフを持っていないほうのレオリースの手が、俺の襟元に伸ばされる。

とたん、シュッと目の前を猛烈なスピードで黒い影がよぎった。シルだ！

バシンッ！

「きゃあっ！」

ものすごい音とともに俺の上からレオリースが吹っ飛ぶ。死角から猛ダッシュしたシルが、レオリースの腹に猛烈な蹴りを打ち込んだのだ。

「大丈夫か!?」

レオリースを横蹴りで吹っ飛ばしたシルが、すかさず俺を助け起こしてくれる。

「あ、ああ。なんともない。ありがとう、助かった」

シルに「怪我はないか？」と身体中をチェックされながらレオリースを見ると、蹴り飛ばされたままの姿勢で、腹を抱えて泣きじゃくっていた。これまで甘やかされるだけで、痛い思いなどしたことがないのだろう。

それを見たシルがフンと鼻で笑う。

「たいしたことはないはずだぞ？ 少なくとも内臓はやっていない」

つまりはそれ以外の怪我、すなわち打撲や肋骨のヒビくらいは織り込み済みだということか。

レオリースがしてきたことを思えば同情の余地はない。むしろスカッとした。さすがシルだ。

涙を流しながら蹲すまたっているレオリースに、俺は淡々と告げた。

「なあ、レオリース。人を恨んで何が変わる？ お前に将来がないのは、お前がこれまで努力もせず遊び暮らしていたからだ。お前自身の問題だ。繰り返しになるが、今回お前に優秀な教師をつけて学ばせたのは、俺とルディアスの最後の温情だった。それを無にしたばかりか俺を襲うなど、逆恨みも甚だしい。いいか？ 俺とお前はもう他人なんだ。今度ここに来たら騎士団を呼ぶ。容赦などしない。覚えておけ」

レオリースはそれでも拗ねたように顔を背けたまま。ここまで言われ、なお彼は「自分は被害者」だと思っているのだ。

これまで誰かに助けられるのを当たり前として生きてきたレオリース。背負うべきものを俺や他の者に負わせてきた彼には、自分が何かを成すという発想がないのかもしれない。自らの足で立たぬ限り、レオリースに未来などないというのに。

「なあ、レオリース。……逃げるな。公爵たちに未来はない。だが、お前は違う。自分にできることを見つけるんだ。甘えるな。自分の足で立て。身を立てる術を見つけれ。必死で現実に向き合い、喰らいつけ。お前の未来はその先にしかない」

そう言い置いて、そのまま背を向ける。

レオリースを助け起こしたりはしない。彼はそれだけのことを俺にしてきたのだから。

だが……俺は願う。俺の弟がその足で自らの道を切り開く未来を。

すぐ近くの辻馬車に、レオリースを公爵家に送り届けるように頼んだ。きちんと家人に引き渡すよう、多めに心づけを渡して。

これで本当にさようならだ、レオリース。

お前は最後まで俺を利用することしか考えていなかった。お前が少しでも俺を兄としてみてくれたなら……俺の気持ちを慮^{おもはか}ってくれたのなら、違^{ちが}う未来もあったらうに。

屋敷に戻ると、急に身体が重く感じた。階段を上って部屋に行くのすら億劫^{おっくう}で、そのままホール

のソファにガクリと崩れ落ちるようにして倒れ込んでしまう。

「……疲れた。少し休ませてくれ」

もう割り切ったつもりだったが……やはり心に負担はかかる。

シルが俺を気遣うように横に座り、俺の頭をそつとその肩にもたれさせてくれた。そのままゆっくりと指先で俺の髪を梳^すくようにして撫でるシル。

「大丈夫か？」

シルの体温と声を感じたとたん、飛びかかれてナイフまで向けられた恐怖、改心してくれるかもというわずかな期待まで裏切られた悲しみ、憎しみの目を向けられた衝撃などが一気に俺を襲った。

レオリースが来るかもしれないと警戒はしていた。

でも、待ち伏せされ罵^{のの}られたりすがられたりする程度だろうと思っていたのだ。

俺は甘かった。まさかレオリースがナイフまで持ち出すとは思ってもみなかった。

家族ではないと言ったが、それでも……身内だった者に襲われたのは、自分で思う以上にショックだったようだ。今頃になって手が震えてきた。

「は、はは。どうやら……俺は傷ついているみたいだ。あんな奴でも、可愛い弟だと思っていた時期もあった。少し……ほんの少しだけ期待していたんだ。これをきつかけにあの頃のように戻してくれるのではないかと」

今のままのレオリースでは、未来は明るくない。平民の、しかも最下層まで落ちるかもしれない。

それがレオリスが選んだ道。

俺は自分で道を切り開いた。過去の俺の努力が、涙が、今の俺の確かな力となっている。

だがここまで来られたのは、決して自分だけの力ではない。シルの、アルの、^{マイジ}オル兄の、マージェス家の助けがあった。友人のアドバイスがあった。そして……切り捨てたはずのルディの助けまで。見回せばそこにたくさんの助けてくれる手があった。

自分を磨くこともなくただ可愛さの上に胡坐をかいて生きてきたレオリスの周りには、見た目や表面上の言葉に惹かれて、彼を持ち上げてちやほやするだけの輩しかない。

これからレオリスが逆境に落ちたとして、レオリスに伸ばされる手はあるのだろうか。彼を叱り、それでも引き上げてくれる腕はあるのだろうか。

昔、ほんの小さな頃の記憶。恐らく俺が四歳、レオリスが三歳くらいの頃。

唯一の俺の味方だった乳母を首にされたショックで俺は熱を出し、一人きりで寝込んでいた。母も父も顔を出さぬそんな俺のところに、レオリスだけがこっそりと会いにきた。

「おにーさま、だいじょーぶ？」

「うつるといけないから。近寄ったらダメだ」

「ぼくはかぜひかないもん。つよいこねっていつもおかあさまがいつてるもん」

だから大丈夫なのだ、とレオリスがその小さな手を俺の額に当てた。

「なおれなおれ！ おにいさまのおねつ、はやくなおりますよーに！」

不思議と熱が引いていくように思えた。

頬を赤らめてにこつと笑った可愛らしい顔、ピタリと触れたその小さな手の心地よさを、俺は今でも覚えている。

そのあと、慌ててレオリスを探しに来た夫人によって、レオリスは連れて行かれた。たったそれだけの思い出。

だがそれだけが、シルが公爵家に来るまでの間、俺の心を温めてくれた。俺を生かしてくれた。あの可愛かった弟は、レオリスの中にはもういないのだろうか。

俺は家族を捨てた。そして、想い出の中の可愛い弟すら、今日完全に失ったのだ。

いつの間にか、ホールのソファでそのまま眠ってしまっていたようだ。妙に暖かいと思ったら、シルが毛布をかけてくれたらしい。シルの匂いのする毛布に、少し気分が上向きになる。

と、聞こえて来たコトコトという微かな音と、ミルクのような甘い匂いに、ゲウ、とお腹が鳴ってしまった。

そうだ、結局食事を食べ損ねていた。

「……シル？」

「ああ、起きたか？」

ホールの簡易キッチンから、エプロンを付けたシルが姿を見せる。

「シチューを作ったんだが……食えるか？ こんな日は二人で温かいものを食おうぜ。来いよ」

エプロンを外してほいとソファの背に置いたシルが、グイッと俺の手を引いた。手を引かれて向かった先は、二階。しかも、まだ使っていない客室の前。

「なんだ？ 何があるんだ？」

俺の言葉にシルが悪戯そうにくるりと目を回して見せる。

「秘密。開けてみるよ」

扉の中にあつたのは……すごい！ なんだこれは！

「秘密基地か！」

思わず歓声をあげてしまう。

テーブルと椅子、毛布とシートでできたテントのような秘密基地。絵本と夢の中だけの場所。物語で見たそれに、俺はずっと憧れていた。

シーツのカーテンを開けて中を覗き込めば、ふかふかなクッション、ラグ、小さなランプがいくつか。保温機能のついたポットとカップまであった。

とても居心地の良さそうな基地だ。巣穴にこもるウサギのようにここにこもってしまいたくなる。

「さあ、どうぞ？」

促されるままに巣に潜り込んで腰を下ろすと、すかさずふわりと柔らかな毛布を膝にかけられた。「夕食を持つてくるから、待つてな？」と幼子にでもするようにぼんぼんと頭を撫でられる。

「それまで基地を探検していいか？」

ワクワクしながら聞けば、シルがニヤリと笑った。

「宝を隠したから探してみるか？」

なんと、宝探しまで！ いても立つてもいられず、叫んだ。

「シル、天才だな！」

「シル様にぬかりはない！ はっはっは！」

シルはこうやって、子ども時代の俺が憧れていたものや取り零^{こぼ}したものを、一つ一つ拾い集めて与えてくれるのだ。俺が本当に欲しいものに、シルだけが気づき、こうして与えてくれる。

素晴らしい秘密基地に、重苦しい気持ちが一気に軽くなった。

嬉しくて泣きたくなる。

いや、今は泣いている場合じゃない。ふると頭を振って気持ちを切り替える。

さあ、宝探しだ！

ふむ……ここが怪しい。端にさりげなく置かれたクッションをのけてみる。

「！ 手紙だ！」

胸をときめかせながら封を開けると「残念！ もっと右！」の文字。

右か。右にはランプ、ティーセット……ふとランプを持ち上げてみたが、何もない。

うーん……もしかして！ ペロリとテントをめくってみると……

「本だ！」

出てきたのは、ワクワクするような冒険譚^{たん}。挿絵付きなので子ども向けなのかもしれないが、その絵を見るだけで想像をかき立てられる。

思わず夢中になってページをめくり……

「……ル。ミル。メシだぞ？」

シルの声にハツとした。

俺の前には既にシチューとパン、チーズとベーコンを載せた盆がセットされていた。

俺の顔を覗き込むようにして身をかがめたシルが、にこにこ笑いながら俺の頭を撫でる。

「無事に見つけたみたいだな？ どうだ？ 宝は」

「素晴らしい宝だ！ ありがとうシル！」

高揚した気持ちのままぎゅっと胸の前で本を抱きしめた。まだ胸が熱い。

「後と一緒に読もう。最悪の日が素晴らしい日に変わった。シルはすごいな。魔法使いみたいだ」

俺の言葉にシルがクスクスと笑う。

「ふふ。ミル限定の魔法使いだな？ じゃあ、魔法使いが美味しい飯を食わせてやろう。さあ、どうぞ」

秘密基地の中でシルと二人でシチューを食べる。俺が寝ている間ずっと煮込まれていたらしいじゃがいもはトロトロ、ニンジンも舌で押すだけでつぶれるくらいに柔らかい。

「……美味しいな」

しみじみとした声が出た。

シチューを口を含み、パンにチーズ、カリッと焼いたベーコンをもりもり食べる。

「おかわりはまだあるか？」

行儀悪く食べ物で頬をいっぱいに膨らませたままねだる俺に、シルがブツツと吹き出した。

「あはは！ あるぞ！ たくさん食って大きくなれよ、ミル！」

公爵家にいた頃は、豪華な食事にも何の味も感じなかった。単なる栄養補給にすぎなかった。

でもシルのシチューやパンは、何もかもが俺の食欲をこんなにも刺激して、お腹を満たし心も満たす。身体を温め心も温める。

秘密基地もお宝もシチューも、シルが与えてくれるものは全部俺を満たして温めてくれる。

「……ただ甘やかされて育ったレオリスよりも、俺のほうが幸せだったのかもしれないな」

俺には家族がなかった代わりに、シルがいた。自らの足で立つ俺の背を支えてくれたシルが。つらくとも、すぐ傍でその努力を認め、背中を押してくれるシルがいたのだ。

レオリスには甘やかす人はいた。だが、果たしてその心を温めてくれる人はいたのだろうか？ 求める前に助けられ、自らの足で歩く術を知らずに育ったレオリス。レオリスにもシルのような人がいたら、ああはならなかったのかもしれない。

レオリスは、王家より示された温情を足蹴にした。これから学園に戻れたとしても、状況はより一層厳しいものとなるだろう。

どうか、気づいて欲しい。人を妬んだり恨んだりするだけでは、何も変わらないんだ、レオ。お前にもあっただろう？ 生きる力が。温かな優しい強さが。

それを取り戻してくれ。誰かの助けを待つのではなく、自分の足で立つんだ、レオリス。